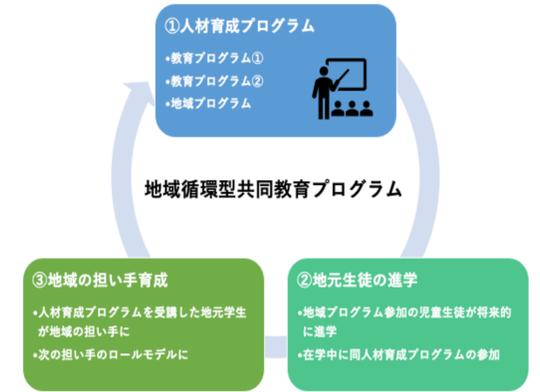


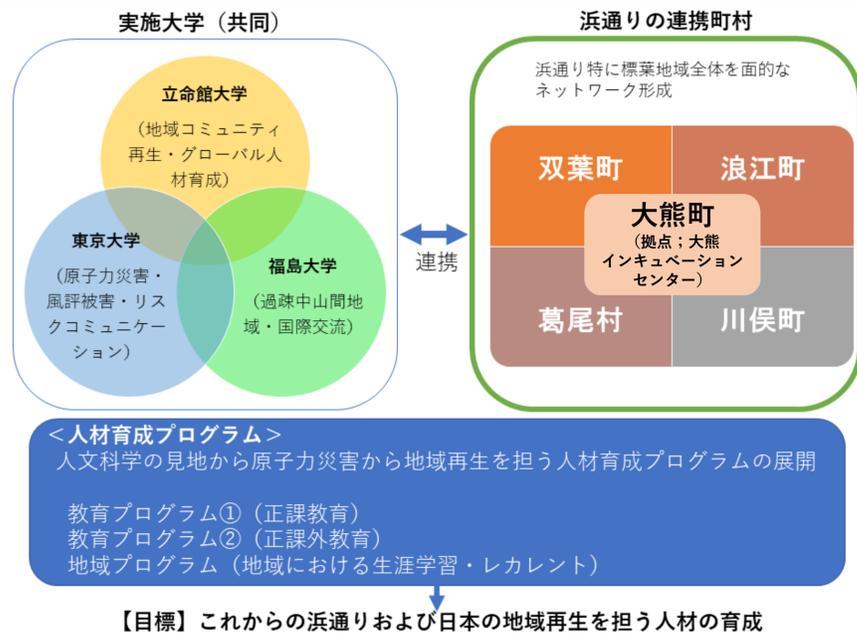
立命館大学・東京大学・福島大学 人文社会科学の復興知に基づく標葉地域の 循環型共同教育の実践

1. 事業概要

本事業は、風評払拭、リスクコミュニケーション、生業再建、コミュニティ再生などに関する人文社会科学分野の復興知をネットワークし、東日本大震災および原子力災害を研究し、長期避難を余儀なくされた浜通りに関わり研究・教育活動をしてきた3大学が共同で、学生・院生の地域でのフィールド教育、また地域の児童および住民向け教育のプログラムを構築し、教育を通して「人」が循環し交流する「地域循環型共同教育プログラム」を構築する。浜通り地域で活躍する人材、浜通り地域を研究する「地域循環型」人材を育成する。具体的には、**大熊町・双葉町・浪江町・川俣町・葛尾村**の標葉地域を中心に実践する。



2. 市町村との連携体制の構築及び5年間の人材育成目標



「地域循環型人材育成」とは、持続的な教育プログラムを実施することにより、教育プログラムの修得者が将来の人材育成の担い手として地域人材に成長することを想定したものである。原子力災害によって生じた課題においては「解」のない問いを持ち続け、多面的・複眼的に物事をとらえ「最適解」を導き出すような教育プログラムの実施が必要である。これは課題先進地域と言われるふくしまをフィールドにすることにより、将来の日本の様々な地域課題を解決する人材の育成にも寄与できる。正課・正課外・地域と3つのプログラムを実施し、そこに参加した児童・生徒および住民が、3大学に進学をすることをめざす。なおこれによって入学した地元学生については、本事業における人材育成プログラムの履修をすることにより、在学中も福島の地域課題について学術的見地から探求をすることができる。将来は、こうした学生が地元の担い手となり、さらには次の人材育成のロールモデルとしてプログラムにおける地元講師などを務めることをめざし、地域が循環して人を育てかつ自走していく仕組みを構築する。

3. 取組み1；立命館大学の教育プログラム「チャレンジふくしま塾」

正課外の教育プログラムの実施（立命館大学）

福島のこれまでとこれからに関心を寄せる学生たちが、福島や震災からの復興に関わる教員や専門家と学び発信活動に取り組むプログラム（福島県庁と立命館が連携して2017年度にスタートした課外プログラム）

【プログラムの流れ・本年度の活動】※写真は本年度分

- ① 4～6月 学生の募集。教員が学生から提出された事前課題を審査して20名の参加が決定。
- ② 6月22日 事前学習会。川内村村長を招聘して講演を実施。
- ③ 8月2～6日 現地フィールドワークの実施。
- ④ 10月20日 学外者向け国際交流イベント「Asia Week」出展。



4. 取組み2；立命館大学の教育プログラム「教養ゼミナール」

正課教育としての教育プログラムの実施（立命館大学）

「ふくしま、東北の復興から学ぶ課題解決プロジェクト」をテーマに、原子力災害によって引き起こされた地域課題を解決する課題解決型学習を中心に、「解のない課題」に挑戦する人材の育成を目指すプログラム（2023年度より正課科目として新設）

【プログラムの流れ・本年度の活動】※写真は昨年度分

- ① 9月 履修登録。20名を上限。
- ② 10月 事前学習の実施。担当教員が原子力災害による被害と復興の現状を講義、グループ分け。浜通りの各地域について調査し、活動の対象としたい地域を選定。各地域の特色や課題についてグループワークを行い、隔週で報告。
- ③ 11月・1月 現地活動の実施。1月に最終報告会。



5. 取組み3；東京大学・福島大学の教育プログラム

正課教育としての教育プログラムの実施（東京大学）

教育部生（学部生相当）向けの「メディア・ジャーナリズム研究指導」や大学院生向けの「原子力災害論」などにおいて、正規カリキュラムを事前学習として実施。

また浪江町・大熊町・双葉町などの双葉郡において、学生を対象とした現地フィールドワーク型の実習を実施。本教育プログラムにおいては、福島県内の施設や人が現状、誰に何を伝えようとしているのかを学び、「人に災害の経験を伝える」ということを考える。



正課教育としての教育プログラムの実施（福島大学）

一部の学生交流協定校より短期留学生を招き、福島県の各地域に赴き、地域住民や学生等との交流を中心としたフィールドワークプログラムを行う。世界で誤解されやすい福島に関連するトピックを英語で解説し、異文化・日本文化を大熊町を通して体験。また、葛尾村では集落全戸調査を実施。現在の集落の機能、社会関係資本、住民生活の現状とこれからの意向の把握を目指す。

